The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪方言のトの分析 ： 引用のト・条件のト・付帯状況の-ント
Author(s)	高木, 千恵
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2023, 19, p. 58-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92433
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 19 号（2023 年 2 月）58-75
〈研究論文〉

大阪方言のトの分析

―引用のト・条件のト・付帯状況の-ント―

高木　千恵

【要旨】

本稿では、大阪方言の「ト」が、引用節、条件節、付帯状況や並列（対比）の節を作る形式として使われることに注目し、節の従属度・述語の肯否・アクセントという 3 つの観点から次の 3 点を明らかにした；(a)「引用のト」は南不二男の分類における D 類従属節であり、共起する述語の肯否に偏りがなく、低接のアクセントをもつ、(b)「条件のト」は B 類に属すが、否定の条件節に使用が傾き、アクセントは順接である、(c)「付帯状況のト」（および並列のト）は B 類のなかでもより従属度が高く、「ント」という形でのみ使用され、アクセントは「ン」で下がる。三者を対照すると、「引用のト」「条件のト」が文終止で不適格になる形とは接続しないのに対して、「付帯状況のト」は文終止での適格性とは無関係に「ント」の形をとる。以上から、接語と分析できるのは「引用のト」「条件のト」であり、「付帯状況のト」は-ントで 1 つの接辞と捉えられると結論づけた。

【キーワード】従属度、肯否の非対称性、アクセント、接語のト、接辞の-ント

1.　はじめに

大阪方言において、従属節を作る「ト」という形式は、次に挙げるようにさまざまな使い方をする[1)]。

（1）あの人誰にも言わんト思う。（あの人は誰にも言わないと思う）　【引用節】
（2）それ言うト怒られんで。（それを言うと怒られるよ）　【条件節】
（3）はよ言わんト、怒られんで。（早く言わないと、怒られるよ）　【条件節】
（4）それはよ言わんトあかん。（それを早く言わないといけない）　【条件節・連語】
（5）だれにも言わんト黙っとった。（だれにも言わないで黙っていた）　【付帯状況】
（6）パンが売れんトおにぎりがよう売れた。（パンが売れないでおにぎりがよく売れた）　【並列（対比）】

このように大阪方言のトは、引用節、条件節、付帯状況や並列（対比）を表す形式として使われる[2)]。これらは基本的に「用言ト」という形で現れるが、それぞれは 1 つの形式によ

1）以下、例文はすべて大阪方言（摂津方言）を母方言とする筆者による作例である。文全体を漢字かな交じりの大阪方言で記し、議論の対象となる部分をカタカナで表記する。必要に応じて末尾の（　）内に標準語訳を添える。
2）このほかに、体言に直接つく格助詞のト・並列助詞のトがある。
〈1〉お父さんト行こ。（お父さんと行こう）　【格助詞】
〈2〉お父さんトお母さんにあげる。　【並列助詞】
本稿では記述の対象を従属節のトに限定し、格助詞・並列助詞のトは扱わない。

る異なる用法ではなく、意味を異にする別形式と考えられる。本稿ではこのことについて、節の従属度・述語の肯否・トのアクセントに注目して分析する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず 2 節において先行研究におけるトの記述を概観し、問題のありかと本稿の目的について述べる。続く 3 節では、節の従属度・述語の肯否・アクセントという 3 つの観点からトの特徴を分析する。4 節では考察として、分析結果を整理し、3 つのトがそれぞれに異なる特徴をもつことを指摘したうえで、付帯状況や並列に現れるトについて、接語ではなく-ント（*-(a)ᴺto*）という接辞として分析されるものであることを主張する。さいごに 5 節で本稿の内容をまとめ、今後の課題を述べる。

2.　先行研究と問題のありか

本節では、大阪方言の概説書や言語地図などのデータを参照しつつ、大阪方言のトの概略を述べる。大阪方言の概説書である郡編（1997:49）にある助詞のリストには、「相手のト」「引用のト」「条件のト」が挙げられている。「相手のト」は格助詞のトのことで（注 2 も参照）、「引用のト」と「条件のト」が従属節を作る形式である。また、大阪方言のテ形相当形式について記述した高木（2000）には、（否定の）付帯状況や並列（対比）を表す形式としてト（ント）があることが述べられている。以下、「引用のト」「条件のト」「付帯状況のト」と呼び、それぞれについて概観する。なお、付帯状況と並列（対比）を分けて扱うべきか否かについては、当該の形式をとりあげて詳細に分析したうえで検討する必要がある。後に 3 節でみるとおり、本稿で立てた 3 つの観点（従属度・述語の肯否の非対称性・アクセント）において両者にほとんど違いがないことから、本稿ではこれらを分けて扱うことをせず「付帯状況のト」で代表させ、必要に応じて並列のトにも言及することとする。

2.1.　引用のト

大阪方言の引用のトについては、同じく引用のテとともに、それらが「省略される」現象（いわゆる「ト抜け」）という点から扱われることが多い。山本（1982:225）や郡編（1997:51-52）も、引用の助詞にトとテがあることに加えて、「言う」「思う」が続く場合に省略されやすいことを大阪方言の特徴として挙げている。

ただし、大阪方言においてトがまったく使われないわけではない。「ト抜け」現象の動態を扱った西田（2019）は、「ト抜け」が観察されるのは「言う」「思う」という 2 つの動詞が引用節の直後にくる場合に限られ、それ以外の環境では生じないと述べている。たとえば、引用節と「言う」「思う」のあいだに主語や副詞など他の成分が生起する場合、あるいは主節の動詞が「聞く」「書く」など「言う」「思う」以外の動詞である場合には「ト抜け」が生じないという。そして、高年層・中年層・若年層の大阪方言話者によるカジュアルスピーチを分析した結果として、後続する動詞が「思う」である場合には 3 世代とも「ト抜け」よりトを使用する割合の方が多いことを指摘している。同じく『方言文法全国地図（GAJ）第 5 集』第 233 図（「おれは東京に行こう<u>と思っている</u>」）における大阪府下の回答でも、「ト抜け」とトが 4 地点ずつで（併用回答の地点あり）、かならず「ト抜け」が生じるわけではないことが窺える。また西田（前掲）は、主節の動詞が「言う」のときは「ト抜け」の出現率

に世代差があり、高年層に比べて若年層で「ト抜け」率が低いこと、および「言う」に後続しやすい引用の助詞はトではなくテやッテであることを明らかにしている。このことから、大阪方言において引用のトはおもに「思う」と共起して使われるといえる。

引用のトは、京阪系方言のアクセント体系を扱った中井編（2002:274）にも記載があり、前の語に対してかならず低くつく「低接」のアクセントをもつとされている。ただし同書では「N とという（N）」のような名詞（N）に続くトだけが立項され、引用節の例は載っていない。先に挙げた郡編（1997:49）もト抜けやテの発話例を挙げるのみである。

2.2. 条件のト

次に条件のトについて概観する。郡編（1997:38-39）は、大阪方言の仮定表現（条件表現）について「「タラ」を使うのがふつう」（p.39）とし、「「行けば」「行くと」「行くなら」のような「ば」「と」「なら」は日常の話しことばでは使わない」（p.39）と述べている。GAJ をみても、第 3 集の第 126～131 図「起きれば」「任せれば」「書けば」「死ねば」「来れば」「すれば」や第 143 図「高ければ」に対する大阪府下の回答にはほぼ-タラが使用されている。ただし、第 4 集 169 図「お前が行くとその話はだめになりそうだ」にはトが散見され、まったく用いられないわけではないことが窺える。

条件節を作る形式のバリエーションに、前接する述語の肯否による偏りがあることを指摘したのは舩木（2014）である。舩木（前掲）は山口東部方言の条件表現形式トをとりあげて記述したもので、そのなかで大阪方言のトにも触れている。舩木（前掲）によれば、山口東部方言でも大阪方言でもトが肯定の条件節に使いにくい一方で、否定の条件節では自然であるという。舩木（前掲）による大阪方言の例を以下に示す。

（7）練習に｛行かナ／行かんト｝上手にならんで。

（練習に｛行かなければ／行かないと｝上手にならないよ）

（舩木 2014 より、一部表記を改めた）

上例（7）にある-ナは否定辞の条件形「-ネバ」に由来する形式で（ネバ＞ニャ＞ナ）、郡編（1997:39）では標準語の「しないと」に当たるとされている。郡編（前掲）は（7）のような否定の条件節のトには言及していないが、「必要性や義務を表す表現」（p.48）のうち標準語の「しないといけない」にあたる表現として-ナ（およびこれの音変化形-ン）とトを挙げている（例：イカナアカン・イカンナラン・イカントアカン）。

これをふまえて否定の条件節に関する GAJ の結果をみてみると、大阪府下においては、第 4 集第 153 図の「行かなければよかった」では-タラがよく使われている。一方で、第 5 集第 206 図「行かなければならない」では「イカナアカン」「イカンナラン」のように否定辞の-バ条件形に由来する形式が回答されている。ただしトによる回答はみられない。

以上から、大阪方言で用いられる条件表現形式は述語の肯否によって異なることが窺える。すなわち、肯定の条件形にはおもに-タラが使われ、場合によってはトも使われる。一方否定の条件形には、-タラのほか、-バの条件形由来の形式（-ナ・-ン）、およびトによる形式（ント）が使われるようである。使い分けの詳細は不明ながら、GAJ の結果はそれぞれの意味的な違いを反映しているようにみえる。

なお、条件のトのアクセントについて中井編（2002）は、立項はしていないが、助詞・助動詞のアクセントの概説のなかで例示している（p.43）。これによれば条件のトのアクセントは順接であり、前接する自立語のアクセントを変えないで接続する。また郡編（1997:48）の発話例に付されたピッチの記号からも、トが順接であることが窺える。

2.3.　付帯状況のト

大阪方言における付帯状況を表す形式として、郡編（1997）はトに触れていないが、GAJ 第 4 集第 155 図「仕事に行かないで遊んでばかりいる」の大阪府下の回答にイカントの形がみえる。また、大阪方言におけるテ形相当形式について記述した高木（2000）は、否定の付帯状況および並列（対比）を表す形式としてト（ント）があることを指摘し、標準語の「ないで」「なくて」「ずに」と対照しつつントの使われる範囲を整理している。これによれば、ントは南（1974）の従属度の分類における B 類従属句に相当し、「しないで」や「せずに」と同様、（否定の）付帯状況を表す形式として、また並列（対比）を表す形式として使われるという（例文中の*は不適格であることを示す）。

（8）返事を｛しないで／*しなくて／せずに／セント｝考え込んでいた。

（9）この子は親に｛似ないで／*似なくて／似ずに／似ント｝、おじいさんに似ている。

（高木 2000、(50)(66)、一部改変）

上例（8）は付帯状況、（9）は並列（対比）の例である。高木（前掲）は、否定の付帯状況や並列（対比）はもっぱらントによって表され、ンデやンクテのような他の動詞否定テ形相当形式は用いられないと述べている。

（10）ふざけ｛ント／*ンデ／*ンクテ｝きいていろ。　（高木 2000、(51)）

このントについては先に挙げた舩木（2014）でも触れられており、近世の「ずと」に由来する可能性を指摘している。また GAJ のデータにもとづいて否定辞中止形の全国分布を概観する大西（2019）は、ントを「否定辞＋助詞」型の 1 つとしている。なお、付帯状況のトのアクセントは中井編（2002）に記されていない。

2.4.　問題のありか

ここまでみてきたように、大阪方言の従属節を作る形式にトがあり、引用・条件・付帯状況や並列において使われることがわかっている。しかしそれぞれの文法的な意味を指摘するに留まり、詳しい記述がなされていないのが現状である。たとえば条件のトが肯定より否定の条件節に使われやすいことや、付帯状況のトが否定としか結びつかないことなどは重要な特徴であると思われるが、こうしたことを正面からとりあげたものはないようである。

また 3 つのトは、文法的な意味の違いだけでなくアクセントにも違いがあるが、これについてはさほど注意が向けられてこなかったようである。次に示すとおり、3 つのトはいずれも異なるアクセントパターンで実現される。例文に付す[ ]はピッチの高さを示し、[ ]で囲まれたところが相対的に高く発音される（以下、他の例文においても同様）。

（11）まだやらント思うわ。（まだやらないと思うわ）

まだ　**[やらん]と**　[おもう]わ　【引用のト】

(12) やることやらント怒られんで。(やることをやらないと怒られるよ)
[やるこ]と　**[やらんと**　おこられん]で。　【条件のト】
(13) やることやらント、文句ばっかりや。(やることをやらないで文句ばかりだ)
[やるこ]と　**[やら]んと**　[も]んくばっ[か]りや　【付帯状況のト】
(14) あんたがやらントあの子がやったんか。(あなたがやらないであの子がやったのか)
あんたが　**[やら]ント**　[あの子が　や]ったんか。　【並列(対比)のト】

上例のとおり、引用のトは高起無核の述語に対して低くつき(例(11))、条件のトは同じ高さでつく(例(12))が、付帯状況・並列のトでは述語のアクセントパターン自体に変化が生じる(例(13)(14))。このように三者は文脈ではなくアクセントによって区別できるが、この点について記述したものはみられない。

3つのトにみられる述語の肯否の偏りやアクセントの違いは、従属節を作る形式としてト(だけ)をとりだすことの妥当性を考えるうえでも重要である。3つのトによる従属節はいずれも「述語＋助詞(接語)」という構成と考えられてきたようであるが、少なくとも付帯状況(および並列)に関しては、-ントでひとまとまりの付属形式とみるべきではないかと思われる。

以上のような問題意識のもと、本稿では、引用のト、条件のト、付帯状況のトについて、従属度・述語の肯否・アクセントという観点から分析し、いずれにおいてもそれぞれに異なる特徴があることを指摘する。なかでも付帯状況のトについては、「否定辞-ン＋助詞ト」ではなく「-ント」という1つの接辞と捉えられることを主張する。

3. 現象の整理

結論を先に述べれば、引用のト・条件のト・付帯状況のトの特徴は表1のようになる。3つのトはいずれも従属節を作る形式だが、従属度には違いがあり、引用のトがD類であるのに対して条件のト・付帯状況のトはともにB類である(3.1節)。またそれぞれの節がとる述語の肯否について、引用のトには非対称性がなく肯定・否定ともに生起できるのに対して、条件のトでは否定に偏り、付帯状況のトでは否定のみが適格である(3.2節)。さいごにアクセントについて、引用のトは低接のアクセントをもち、前接語に対してつねに低くつく。条件のトのアクセントは順接であり、音の高さは前接語のアクセントパターンに従う。これに対して付帯状況のトは、「前接語ト」でひとまとまりのアクセント句を作り、後ろから3拍目に下がり目をもつ(3.3節)。以下、それぞれについて詳しくみていく。

表1　引用のト・条件のト・付帯状況のトの特徴

	引用のト	条件のト	付帯状況のト
従属度※1	D類	B類	B類
述語の肯否の非対称性	(なし)	肯定＜否定※2	否定のみ
アクセント	低接	順接	-3※3

※1「従属度」は南(1974; 1993)に従って判断した。※2 不等号(＜)は述語が否定に偏ることを示す。
※3 トを含む従属節末尾から数えて3拍目にアクセントの下がり目があることを示す。

3.1.　節の従属度

本節では、トが使われる 3 つの従属節の従属度について整理する。南（1974:128-129; 1993:97-98)、およびこれを再整理した庵（2012:199-209）による従属節の分類に従うと、引用のト、条件のト、付帯状況のトの従属度は表 2 のようになる（表中の①～⑩は庵 2012 を参考に筆者が立項した)。以下、順に説明する。

表 2　引用のト・条件のト・付帯状況のトの従属度

	①ヴォイス	②格成分（ガ格を除く）	③アスペクト	④ガ格	⑤丁寧さ	⑥肯否	⑦テンス	⑧主題	⑨対事的モダリティ	⑩対人的モダリティ	従属節のタイプ
引用のト	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	＋	D 類
条件のト	＋	＋	＋	＋	＋	＋	－	－	－	－	B 類
付帯状況のト	＋	＋	＋	(＋)	－	－	－	－	－	－	B 類

凡例　＋：生起する、(＋)：生起する場合がある、－：生起しない

3.1.1.　引用のトの従属度

引用のトは従属度が低く、文を作るすべての要素を含むことができる。

(15) わたしは、あの子は⑧｛行く／行った｝⑦やろ⑨ト思ってて ん。
（わたしは、「あの子は｛行く／行った｝だろう」と思っていたの）
【⑦テンス、⑧主題のハ、⑨対事的モダリティ】

(16) わたしは｛できひん／できません｝⑤⑥ト思って、知らん顔しとってん。
（「わたしは｛できない／できません｝」と思って、知らん顔をしていたの）
【⑤丁寧さ、⑥肯否】

(17) わたしもうやってられんわト思ってん。
（「わたしはもうやっていられないわ」と思ったの）　【⑩対人的モダリティ】

(18) 自分でやれト思うわ。（「自分でやれ」と思うわ）　【⑩対人的モダリティ】

表 2 にも示したように、引用のトは、条件のトにない⑦テンスの対立があり、⑧主題のハや⑨対事的モダリティを節に含むことができる（例 (15)）。また付帯状況のトがとることのできない⑤丁寧さや⑥肯否の対立もある（例 (16)）。さらに、⑩対人的モダリティに後続することも可能である（例 (17)（18)）。対人的なモダリティを担う形式を節内に生起させられることから、引用のトは D 類従属節といえる。

3.1.2.　条件のトの従属度

次に条件のトは、⑤丁寧さ・⑥肯否の対立がある一方で、⑦テンスの分化がない、⑧主題を含むことができない、⑨⑩モダリティ形式が共起しないという制約があり、B 類に相当する。(19) ～ (21) に丁寧さと述語の肯否の例、(22) ～ (25) にテンス・主題のハ・モダリティ形式の例をそれぞれ挙げる。

(19) 今日中にご連絡｛いただける／いただけます｝ト助かりますー。　【⑤丁寧さ】
(20) あんまり高いト売れへんで。(あんまり高いと売れないよ)　【⑥肯否:肯定】
(21) それなりに高ないト売れへん。(それなりに高くないと売れない)【⑥肯否:否定】
(22) あんまり｛高い／*高かった｝ト売れへん。　【⑦テンス】
(23) *原材料は高いト今までみたいにようけ作られへん。　【⑧主題のハ】
cf. 原材料が高いト今までみたいにようけ作られへん。
(原材料が高いと今までみたいにたくさん作れない)
(24) *雨降るやろうト、やる気なくすわ。　【⑨対事的モダリティ】
(25) *雨降るやんト、だいぶ寒なるで。　【⑩対人的モダリティ】

先にも述べたように、⑩対人的モダリティ形式が共起できるのがD類の特徴だが、トは対人的モダリティ形式をうちに含むことができない(例(25))。またC類従属節であれば⑦テンスや⑧主題のハ、⑨対事的モダリティと共起できるが、トによる条件節ではこれらとの共起が許容されず非文となる(例(22)～(24))。その一方で、⑤丁寧さや⑥肯否の対立をもつ(例(19)～(21))。こうしたことから、条件のトはB類従属節であることがわかる。

3.1.3. 付帯状況のトの従属度

付帯状況のトも同じくB類に分類されるが、条件のトより従属度が高く、⑤丁寧さを表す形式が共起しないほか、⑥肯否の対立もなく、否定だけが適格となる。

(26) ｛走らん／*走りません｝トゆっくり歩いてください。
(走らないでゆっくり歩いてください)　【⑤丁寧さ】
(27) テレビ見んト話聞いて。(テレビを見ないで話を聞いて)　【⑥肯否:否定】
(28) *テレビ見るト話聞いて。　【⑥肯否:肯定】
cf. テレビ見ながら話聞いて。

その一方で、A類では共起しないとされる③アスペクト形式の生起は許容される。

(29) ｛喋ってん／喋っとらん｝トはよ風呂行き。
(喋っていないで早く風呂に行きな)　【③アスペクト】

また、同じくA類では共起しない④ガ格は、付帯状況には生起しないが、並列(対比)のトであれば許容される(本稿の分析の観点からはこの点においてのみ付帯状況のトと並列のトで違いがみられる)。

(30) *はるちゃん喋ってんトあきちゃんはよ風呂行き。　【④ガ格】
(31) 本人来んト親だけ来たらしい。(本人が来ないで親だけが来たらしい)　【④ガ格】
(32) 雨降らんト雪降ってほしいわ。(雨が降らないで雪が降ってほしいわ)　【④ガ格】

少なくとも③アスペクトと共起することから、付帯状況のトは、条件のトよりは従属度が低いものの、やはりB類といえる(同様に、並列(対比)のトもB類である)。

このように、それぞれの節の従属度という点において3つのトは区別される。もっとも従属度が低いのが引用のト(D類)で、次いで条件のト(B類)、付帯状況のト(B類)の順に従属度が高くなる。

3.2.　従属節内の述語の肯否の非対称性

次に、3 つのトにみられる述語の肯否の非対称性について述べる。引用のト、条件のト、付帯状況のトにみられる（非）対称性をまとめると表 3 のようになる。表に示すとおり、節の述語としての肯否の制限がないのは引用のトのみで、条件のトは肯定形の述語をとりにくい（不自然になるか、そうでない場合でも使用頻度は低い）。また否定形の場合もヘン否定形は許容しにくいうえ、ン否定形にも一部制限がある。付帯状況のトはもっぱら否定にのみ使われ、かつ、-ントの形だけが適格である。以下、引用のト（3.2.1 節）、条件のト（3.2.2 節）、付帯状況のト（3.2.3 節）に分けて分析する。

表 3　述語の肯否の非対称性

	引用のト	条件のト	付帯状況のト
肯定形	○	▼	×
ン否定形	○	○※	○
ヘン否定形	○	△	×

凡例　○：接続可能、▼：不自然あるいは使用頻度が低い、△：不自然、×：不適格
※ただしアスペクト形式-テルに接続する場合は容認性判断にゆれがある。

3.2.1.　述語の制限のない引用のト

まず引用のトの場合、前にくる述語の肯否に非対称性はなく、肯定形と否定形のどちらにもつくことができる。

（33）明日はたぶん<u>行く</u>ト思う。　【肯定形】

（34）明日はたぶん<u>行かん</u>ト思う。　【否定形】

大阪方言は-ンと-ヘンという 2 種類の動詞否定辞をもつが、引用のトとの共起に制限はなく、どちらも使用可能である。

（35）明日はたぶん｛行かン／行かヘン｝ト思う。　【ン否定形／ヘン否定形】

高木（1999; 2004）でも述べたが、否定辞の-ンと-ヘンは動詞によって文終止の形での使われやすさに違いがある。その特徴は引用のトの前にも現れ、たとえば「知る」の否定形はもっぱら-ンによって作られるため、引用のトが続く場合でも「知らヘン」ではなく「知らン」が使われる。逆にアスペクトの-テルの場合は、否定形に-ヘンが使われ-ンが不適格となるため、引用節でも-ヘンが現れる（もしくは、標準語と同形の-ナイが使われる）。

（36）まだ｛*来てン／来てヘン／来てナイ｝ト思う。（まだ来ていないと思う）
【アスペクト・否定】

cf. まだ｛*来てン／来てヘン／来てナイ｝。　【アスペクト・否定・主節】

こうしたことは否定辞が接続する動詞（や派生接辞）とのかかわりによって決まるのであって、引用のトの接続に起因するのではない。述語の肯否や否定辞の選択に制限がないのは、引用のトがＤ類の従属節を作る形式で、「文」につくことを基本としていることとかかわっていると思われる。

3.2.2.　否定に偏る条件のト

述語の肯否との共起に非対称性がみられるのが条件のトである。舩木（2014）も指摘しているが、条件節の述語が肯定形の場合、大阪方言ではトではなく-タラを用いるのが自然である。「肯定形ト」は文法的に不適格ではないが標準語的に感じられ、方言としては不自然である（例文の??は不自然であることを示す）。

（37）そこのボタン｛??押すト／押しタラ｝発券できんで。
　　（そこのボタンを押すと発券できるよ）　【肯定形】

（38）次の信号右｛??行くト／行っタラ｝さっきんとこ出るわ。
　　（次の信号を右に行くとさっきのところに出るの）　【肯定形】

上例はともに一般的・恒常的な条件を述べたものであり、前件が成立すれば後件はかならず真である。標準語の条件文を扱った前田（2009:40）によれば、このような条件文には「と」（あるいは「ば」）が使われやすいというが、大阪方言では-タラが自然である。

ただし、トがまったく使われないわけではなく、トによる条件文でも大阪方言として自然と感じられる場合もある。

（39）あんまり｛高いト／高かっタラ｝売れへんで。　（（20）再掲）

（40）この辺は水不足ん｛なるト／なっタラ｝すぐ取水制限出るらしいわ。
　　（この辺は水不足になるとすぐに取水制限が出るらしいわ）

（41）それ｛言われるト／言われタラ｝つらいな。

舩木（2014）はこうした例について「前件が肯定形で後件が反期待性を持つ場合は全国的に「ト」が使われる傾向」にあると述べ、このことが大阪方言にもあてはまるとしている。ただしこのような場合でも、使用頻度では-タラが優ると思われる。

肯定の条件節においてトが許容される条件や要因について本稿では追究しないが、いずれにしても、（37）や（38）のように使われにくい場合があることは確かである。一方、否定の条件節におけるトはまったく自然であり、筆者の内省では使用頻度の面でも-タラより使われやすいと思われる。

（42）そこのボタン押さんト発券できひんで。
　　（そこのボタンを押さないと発券できないよ）　【否定形】

（43）次の信号右行かんトさっきんとこ出られへんわ。
　　（次の信号を右に行かないとさっきのところに出られないわ）　【否定形】

この場合、-タラを用いて「押さンカッタラ」「行かンカッタラ」ということもできるが、肯定形による条件節とは違って、-タラの方が自然であるとかよく使われるといったことはない。むしろ、否定の条件節においてはトの方が優先的に使われるようにさえ思われる[3)]。

ちなみに、否定の条件節に現れるのは基本的にン否定形のみで、ヘン否定形はほとんど使われない（高木 2004）。これは、「着る」「寝る」のように文終止の形でヘン否定形がよく使

3）2節でも少し触れたが、否定の条件節を作る形式としてほかに「-ナ（<-ネバ）」がある。
　〈3〉そこのボタン押さナ発券できひんで。　（≒（42））
筆者の内省では、-ナも、「否定形ト」と同程度によく使われる形式である。条件節における-ナと「否定形ト」の異同については、別途考えることとしたい。

われる1拍語幹の母音語幹動詞（一段動詞）でも同様である。

(44) もっと分厚いやつ｛着ン／??着ーヒン｝ト、絶対寒いで。

（もっと分厚いやつを着ないと、絶対寒いよ）　【ン否定形／ヘン否定形】

cf. ふだんあんまりこういう服｛?着ン／着ーヒン｝。

(45) 11時には｛寝ン／??寝ーヘン｝ト、朝起きられへんで。

（11時には寝ないと、朝起きられないよ）　【ン否定形／ヘン否定形】

cf. いつもそんな時間に｛?寝ン／寝ーヘン｝。

否定辞のバリエーションの使い分けと変化を実証的に明らかにした高木（2004）は、-ヘンが従属度の高い従属節内に生起しにくいことを指摘し、その要因として-ヘンがとりたて否定（～シワセヌ）に由来する形式であることを挙げている。3.1.2節でみたとおり、条件のトは主題のハが生起しないB類従属節である。それゆえ、とりたて否定由来の-ヘンが使われにくいのであろう[4]。

ここまで述べたように、条件のトにおけるン否定形の使用は文終止の形における否定辞の使用傾向とは一致せず、主節末でヘン否定形が好まれる動詞にもン否定形が使われる。ただし述語にアスペクト形式-テルがくると、ン否定形が使いにくい[5]。

(46) ??10回出席してント、テスト受けさせてくれへん。

（10回出席していないと、テストを受けさせてくれない）　【アスペクト・否定】

(47) ??正しい筆順で書いてント0点にされんねんて。

（正しい筆順で書いていないと0点にされるんだって）　【アスペクト・否定】

-テルの否定形は、文終止の場合は-ヘン（または標準語と同形の-ナイ）によって作られ、-ンは非文である（前節も参照）。上例でン否定形が不自然に感じられるのにはこのことが関係しているかもしれない。主節末であればヘン否定形をとるところであるが、否定の条件節はヘン否定形をとりにくいのでこれも不自然になる。このような場合、-タラを使って「-テヘンカッタラ」となるか、標準語と同形の否定辞-ナイを用いて「-テナイト」となる。同様のことは存在動詞「いる」にもあり、「??いント」「??いーヒント」ではなく「いナイト」や「いーヒンカッタラ」が使われる（あるいは、もう1つの存在動詞「おる」が使われる）。

以上を整理すると、条件のトにおいては、述語の肯否による非対称性があり、また原則として動詞否定形はン否定形をとる。ただし述語にアスペクト形式-テルが使われるとン否定形の容認度が下がり、代わりにナイ否定形（あるいは否定の-タラ形）が使われる。

---

4) ただし否定の条件節におけるヘン否定形の容認性には個人差がある。標準語の「-ないと」の干渉を受けて-ヘントが許容されつつあることも考えられる。

5) 次例のようにン否定形がさほど不自然でない場合もある（ヘン否定形は不自然）。

〈4〉 テレビ｛つけてン／??つけてヘン｝トなんか落ち着かへん。

（テレビをつけていないとなんだか落ち着かない）

〈5〉 ｛座ってン／??座ってヘン｝ト危ないで。（座っていないと危ないよ）

前件と後件の主体が同一か否かで容認度が異なるように思うが、検討を要する。

3.2.3.　否定だけが適格となる付帯状況のト

付帯状況のトは、3.1.3 節でもみたとおり肯否の対立がなく、否定だけに使われる。

(48) 今日はお風呂入らント寝るわ。(今日はお風呂に入らないで寝るわ)　【否定】

(49) ［置きっぱなしのはさみを指して］ここに置かントなおしといて。
(ここに置かないでしまっておいて)　【否定】

また、ヘン否定形は不適格で、ン否定形しか使われない。

(50) 今日はお風呂｛入らン／*入らヘン｝ト寝るわ。　【ン否定形／ヘン否定形】

(51) ここに｛置かン／*置かヘン｝ト、なおしといて。　【ン否定形／ヘン否定形】

条件のトとは違って付帯状況のトでは、いかなる場合にも-ヘンや-ナイが使われず、アスペクト形式-テルが共起する場合にもン否定形だけが適格となる。

(52) ｛喋ってン／*喋ってヘン／*喋ってナイ｝ト作業して。
(喋っていないで作業して)　【アスペクト・否定】
cf. わたし｛*喋ってン／喋ってヘン／喋ってナイ｝。
(わたしは喋っていない)　【アスペクト・否定・主節】

前節でも述べたように大阪方言のアスペクトの否定形は「-テヘン」であり、否定辞-ンを用いた「-テン」は文終止の形としては不適格である。そのため引用のトにおいても-テンは使われず（3.2.1 節)、また条件のトでは「-テント」「-テヘント」がともに不自然となり、「-テヘンカッタラ」や「-テナイト」のような他の形式が補充的に使われる（3.2.2 節)。ところが付帯状況のトにはそうした制約がなく、「-テント」のみが適格となる。これは、引用のトや条件のトにはみられない付帯状況のトの独自の特徴である。

(53) 人の話｛*聞いてン／聞いてヘン／聞いてナイ｝。
(人の話を聞いていない)　【主節末】

(54) 人の話｛*聞いてン／聞いてヘン／聞いてナイ｝ト思ってたわ。
(人の話を聞いていないと思っていたわ)　【引用のト】

(55) 人の話｛??聞いてン／??聞いヘン／聞いてナイ｝ト先生めっちゃ怒んねん。
(人の話を聞いていないと先生がとても怒るの)　【条件のト】

(56) 人の話｛聞いてン／*聞いてヘン／*聞いてナイ｝ト自分のことやり。
(人の話を聞いていないで自分のことをやりな)　【付帯状況のト】

このように付帯状況のトにおいては、文終止としては非文になる形（-テン）だけが使われる。引用のトが文終止の形のみに接続し、条件のトがン否定形を基本としつつも文終止で不適格になる形（アスペクト形式-テルや存在動詞「いる」のン否定形）を許容しにくいのに対して、付帯状況のトは、文終止の形であることよりも「-ント」の形であることを優先している。後述するが、このことは従属節の構造を考えるうえで非常に重要であると思われる。

ここまで、3 つのトにおける述語の肯否の非対称性についてみてきた。まとめると、引用のトに非対称性がみられないのに対して、条件のトは述語が否定に偏る傾向をもつ。また付帯状況のトはそもそも肯否の対立がなく、否定の付帯状況を表す形式としてのみ使われる。そして 2 つの方言形否定辞については、条件のトでは-ヘンが使われにくく、原則として-ンに接続する。一方付帯状況のトは例外なく-ヘンが不適格となり、-ンだけが許容される。

3.3.　述部のアクセント

ここまでみてきたように、大阪方言の3つのトは、従属度、および述語の肯否の非対称という点から区別される。しかし述語が否定形をとると、三者が同形にみえる場合がある。

（57）ちゃんと言わんト思うだけでは解決せんわ。

（57）は、文字だけからは、引用のト、条件のト、付帯状況のトのいずれにも解釈できる。すなわち、ト節を「思う」の内容とする解釈（引用）、「（何かを）解決する」ための必須条件とする解釈（条件）、そして「思う」の動作主の状態とする解釈（付帯状況）である。

（58）　（57）の解釈

a.「ちゃんと言わない$_{コト}$」が「思う」の内容である　【引用のト】

b.「ちゃんと言う$_{コト}$」が「（何かの）解決」に必須である　【条件のト】

c. 主体が「ちゃんと言わない」という状態にある　【付帯状況のト】

しかし実際には、これらはアクセントによって明確に区別され、低接のトであれば引用、順接のトであれば条件、トから数えて後ろから3拍目に下がり目があれば（つまり、後ろから2拍目で下がれば）付帯状況のトである。

（59）a. ちゃ[ん]と　**[言わん]ト**　[思うだけで]は　[か]いけつ　[せん]わ。

（「ちゃんと言わない」と思うだけでは解決しないわ）　【引用のト：低接】

b. ちゃ[ん]と　**[言わんト**　思うだけで]は　[か]いけつ　[せん]わ。

（ちゃんと言わないと、[頭の中で] 思うだけでは解決しないわ）

【条件のト：順接】

c. ちゃ[ん]と　**[言わ]んト**　[思うだけで]は　[か]いけつ　[せん]わ。

（ちゃんと言わないで、[頭の中で] 思うだけでは解決しないわ）

【付帯状況のト：後ろから 2 拍目で下がる】

本節ではこの点について詳しく述べる。表4・表5は、大阪方言における子音語幹動詞（五段動詞）の①肯定形・②ン否定形と、ン否定形に③引用のト・④条件のト・⑤付帯状況のトが後続した場合のアクセントを高起式と低起式に分けてまとめたものである（①②④は中井編2002も参考にした）。以下、まず3.3.1節で肯定形と否定形のアクセントを示し、そのうえで、引用のト（3.3.2節）、条件のト（3.3.3節）、付帯状況のト（3.3.4節）のアクセントパターンについて分析する。

表4　子音語幹動詞のアクセント（高起式）

①肯定形	②ン否定形	③引用のト	④条件のト	⑤付帯状況のト
[お]る ＨＬ	[おらん ＨＨＨ	[おらん]ト ＨＨＨＬ	[おらんト ＨＨＨＨ	[おら]んト ＨＨＬＬ
[置く ＨＨ	[おかん ＨＨＨ	[おかん]ト ＨＨＨＬ	[おかんト ＨＨＨＨ	[おか]んト ＨＨＬＬ
[はしる ＨＨＨ	[はしらん ＨＨＨＨ	[はしらん]ト ＨＨＨＨＬ	[はしらんト ＨＨＨＨＨ	[はしら]んト ＨＨＨＬＬ

凡例　[ ]：相対的に高く発音される箇所、Ｈ：相対的に高い拍、Ｌ：相対的に低い拍

表5　子音語幹動詞のアクセント（低起式）

①肯定形	②ン否定形	③引用のト	④条件のト	⑤付帯状況のト
書[く ＬＨ	かか[ん ＬＬＨ	かか[ん]ト ＬＬＨＬ	かかん[ト ＬＬＬＨ	か[か]んト ＬＨＬＬ
ある[く ＨＨＬ	あるか[ん ＬＬＬＨ	あるか[ん]ト ＬＬＬＨＬ	あるかん[ト ＬＬＬＬＨ	ある[か]んト ＬＬＨＬＬ

凡例　[ ]：相対的に高く発音される箇所、Ｈ：相対的に高い拍、Ｌ：相対的に低い拍

3.3.1.　ン否定形のアクセント

大阪方言の動詞（肯定形）のアクセントは、2 拍語に 3 類（高起有核・高起無核・低起無核）、3 拍以上の語に 2 類（高起無核・低起無核）ある。それぞれのン否定形は高起無核または低起無核で、いずれも、肯定形における高起・低起の別に従う（表 4・表 5 の①②も参照）。よって 2 拍語の場合、肯定形が高起有核である存在動詞の「おる」、ならびに高起無核の「置く」のン否定形は高起無核に[6]、低起無核の「書く」のン否定形は低起無核になる。

(60) a. 肯定形　　b. 否定形

a-1. [お]る　ＨＬ（高起有核）　　b-1. [おらん　ＨＨＨ（高起無核）

a-2. [置く　ＨＨ（高起無核）　　b-2. [置かん　ＨＨＨ（高起無核）

a-3. 書[く　ＬＨ（低起無核）　　b-3. 書か[ん　ＬＬＨ（低起無核）

また 3 拍語の場合、肯定形・ン否定形ともに高起無核・低起無核のどちらかである。

(61) a. 肯定形　　b. 否定形

a-1. [はしる　ＨＨＨ　　b-1. [はしらん　ＨＨＨＨ　（高起無核）

a-2. ある[く　ＬＬＨ　　b-2. あるか[ん　ＬＬＬＨ　（低起無核）

このようにン否定形のアクセントは、肯定形の式（高起・低起）を反映した無核語となる。

3.3.2.　引用のトのアクセント

次に、それぞれの否定形に引用のトがつく場合について整理する（表 4・表 5 の③も参照）。ン否定形が高起無核の場合を（62）に、低起無核の場合を（63）に示す。

(62) a. ン否定形単独　　b. ン否定形＋引用のト

a-1. [おらん　ＨＨＨ　　b-1. [おらん]ト　ＨＨＨ**Ｌ**

a-2. [置かん　ＨＨＨ　　b-2. [置かん]ト　ＨＨＨ**Ｌ**

a-3. [走らん　ＨＨＨＨ　　b-3. [走らん]ト　ＨＨＨＨ**Ｌ**

(63) a. ン否定形単独　　b. ン否定形＋引用のト

a-1. 書か[ん　ＬＬＨ　　b-1. 書か[ん]ト　ＬＬＨ**Ｌ**

a-2. 歩か[ん　ＬＬＬＨ　　b-2. 歩か[ん]ト　ＬＬＬＨ**Ｌ**

---

6)　「おる」のン否定形について、中井編（2002:286）では高起無核の[オランの他に高起有核の[オ]ランがあり、おもに近畿周辺部で使われるとされている。筆者の内省ではどちらも使うように思うが、こうした点を詳細に分析することは本稿の主たる目的から外れるため以下では高起無核の形だけを挙げる。

このように引用のトが接続した場合でも、ン否定形のアクセントパターン自体は単独のときと変わらない。そしてトは前接する語に対してかならず低くつく。このことから、引用のトは低接のアクセントをもつということができる。

3.3.3.　条件のトのアクセント

一方、ン否定形のあとに条件のトがくる場合は次のようになる（表4・表5の④も参照）。（64）がン否定形が高起無核になる語、（65）が低起無核の語である。

（64）a. ン否定形単独　　b. ン否定形＋条件のト

a-1. [おらん　ＨＨＨ　　b-1. [おらんト　ＨＨＨ**Ｈ**

a-2. [置かん　ＨＨＨ　　b-2. [置かんト　ＨＨＨ**Ｈ**

a-3. [走らん　ＨＨＨＨ　　b-3. [走らんト　ＨＨＨＨ**Ｈ**

（65）a. ン否定形単独　　b. ン否定形＋条件のト

a-1. 書か[ん　ＬＬＨ　　b-1. 書かん[ト　ＬＬＬ**Ｈ**

a-2. 歩か[ん　ＬＬＬＨ　　b-2. 歩かん[ト　ＬＬＬＬ**Ｈ**

上記のとおり、高起無核のン否定形に条件のトがついた場合は全体としても高起無核、低起無核のン否定形についた場合は全体も低起無核である。これは中井編（2002:43）のいうところの「自立語のアクセントを変えることなく、素直に付く付属語」の特徴に合致する。よって条件のトは順接のアクセントをもつといえる。

3.3.4.　付帯状況のトのアクセント

付帯状況のトの場合は、全体として後ろから3拍目に下がり目がくる（表4・表5の⑤）。先ほどと同じくン否定形が高起無核になる語を（66）に、低起無核の語を（67）に示す。

（66）a. ン否定形単独　　b. ン否定形＋付帯状況のト

a-1. [おらん　ＨＨＨ　　b-1. [おら]んト　ＨＨ**ＬＬ**

a-2. [置かん　ＨＨＨ　　b-2. [置か]んト　ＨＨ**ＬＬ**

a-3. [走らん　ＨＨＨ　　b-3. [走ら]んト　ＨＨＨ**ＬＬ**

（67）a. ン否定形単独　　b. ン否定形＋付帯状況のト

a-1. 書か[ん　ＬＬＨ　　b-1. 書[か]んト　ＬＨ**ＬＬ**

a-2. 歩か[ん　ＬＬＬＨ　　b-2. 歩[か]んト　ＬＬＨＬ**ＬＬ**

付帯状況のトの場合、高起式・低起式ともに-ンの前に下がり目がある。ここまでにみたとおり引用のトや条件のトの場合は、低接・順接という違いはあれど、ン否定形単独のアクセントが引き継がれていた。一方、付帯状況のトは、無核語から有核語へとン否定形のアクセント自体が変容している。付帯状況のトが接続した場合にみられる、[おら]ん・[置か]ん・[走ら]ん・書[か]ん・歩[か]んのようなアクセントは、ン否定形単独では現れることがない。

接続する語のアクセントが変容するタイプとしてはほかに、否定辞の-ヘンや過去を表す接辞の-タが挙げられる。-ヘンや-タについて、中井編（2002:43-45）の「助詞・助動詞のアクセント」には記載がなく、「動詞＋助動詞」全体を1語とみて記述している。一方、田中（2005:334-338）は、「その付属語の1拍前から下がる」（p.334）という特徴をもつアク

セントを「共下式（ともさげしき）」と呼び、-ヘンや-タをこのタイプに入れている[7)]。たとえば、「おる」「置く」のヘン否定形は「[お]らヘン」「[置]かヘン」、タ形は「[お]っタ」「[置]いタ」となり、それぞれの接辞の1拍前に下がり目があるといえる（ただし例外もある。詳しくは田中2005を参照）。否定の付帯状況の場合、例外なく-ンの前に下がり目があるので、仮に否定の付帯状況を「ン否定形＋ト」と分析するならば、トのアクセントは共下式といえるだろう。ただし次節に述べるように本稿はこの立場をとらず、「-ント」で1つの接辞とみるべきであると考える。この場合、（66b）や（67b）のようなアクセントパターンが現れるのは「-ント」自体が低接のアクセントをもつためであると説明することができる。

4. 考察

ここまで、引用のト・条件のト・付帯状況のトについて、節の従属度・述語の肯否の非対称性・アクセントという3つの観点からの分析を試みた。以下では、分析結果をふまえて3つのトの特徴を整理し（4.1節）、それぞれの特徴からわかることについて考えたい（4.2節）。

4.1. 3つのトの特徴

3節で述べたことを再度整理すると、まず引用のトについては、D類の従属節を作る形式であり、生起する文法カテゴリに制限がないことをみた。述語の肯否においても偏りがなく、ン否定形だけでなくヘン否定形にもつくことができ、どちらをとるかは動詞（やその派生形）がもつ使用傾向に従う。低接のアクセントをもち、接続によって前接語のアクセントを変容させることはない。

次に条件のトは、テンスが未分化であり、主題やモダリティ形式を従属節内に生起させることができない B 類の従属節を作る形式である。接続する述語は肯定形よりも否定形に偏り、また、ヘン否定形とは共起しにくく、ン否定形への接続を基本とする。ただし、文終止の形としてン否定形を許容しないアスペクト形式-テルの否定形を述語にとる場合には、-ンも-ヘンも使いにくく、標準語と同形の-ナイが使われる（例：してナイト）。アクセントは順接で、前接語のアクセントパターンに従って実現される。

さいごに付帯状況のトについては、条件のトと同じB類に分類されるが、丁寧語と共起せず、また肯否の対立もないことからより従属度の高い従属節を作るといえる。付帯状況のトはヘン否定形をとらないだけでなく、文終止としてン否定形が不適格となるアスペクト形式-テルを述語にとる場合でさえ「-ント」の形が使われる。アクセントの下がり目は後ろから3拍目にあり、かならず-ンで下がる。

引用のト、条件のト、付帯状況のトは、「ト」という形式をもつ点では共通しているものの、従属度・肯否の非対称性・アクセントにおいて個別の特徴をもっている。したがって、それぞれは同一形式ではなく、用法の異なる個別の形式であると結論づけることができる。

---

7) 田中（2005:320-347）は京都方言を対象に付属語・付属形式のアクセントを記述しているが、「引用のト」「条件のト」「付帯状況のト」には触れられていない。

4.2.　付帯状況における「-ン＋ト」の結びつき

ここまで、引用のト・条件のト・付帯状況のトと、分析の対象とする形式を「ト」としてきたが、3 節の結果からは、従属節の述部を「述語」と「ト」に分けることの妥当性について再検討する余地があることが示唆される。とくに付帯状況のトにおけるン否定形との結びつきの強さは注目に値するものである。

付帯状況のトは、かならず否定とともに使われ、前接語のとる否定辞の使用傾向や文終止における適格性とは無関係に-ントの形をとる。アスペクト形式-テルとの共起において、文終止としては不適格となるン否定形が使われることは、付帯状況のトが文を終止させる形に接続しているわけではないことを意味するといってよい。つまり-ントは、「否定辞-ン＋ト」という 2 つの要素からなるのではなく、「-ント」という 1 つの付属形式と考えられるのである。肯定形との範列的な関係をもたないのは-ントがひとまとまりの形式だからであり、また他の否定辞との交替可能性がないのもそのためである。そして、-ント自体が低接のアクセントをもつと考えれば、ン否定形単独の場合とは異なるアクセントパターンが生じることも説明できる。つまり、否定の付帯状況に使われるのは「否定辞-ン＋ト」ではなく、-ント（-*(a)*$_N$*to*）という接辞であるというのが、本稿の分析から導かれる結論である。

なお、3.2 節でみたように、条件のトも、述語がン否定形に偏る点で付帯状況のトと似た傾向をもつ。しかし付帯状況のように「-ント」で 1 形式とみることはできないと思われる。それは 1 つには、条件のトにみられる肯否の非対称性があくまでも傾向であって、肯定形をとることが非文ではないためである。また、ヘン否定形と共起しにくいとはいえ、かならずン否定形が使われるわけではなく、たとえば文終止の形としてン否定形が不適格になるアスペクト形式-テルでは-ントの形が不自然になる。この点でも付帯状況の-ントとは異なっている。さらには、条件のトは動詞だけでなく形容詞や形容動詞・名詞なども述語にとることから、否定の条件節には-ントに加えて-ナイトという形式もある。またアクセントからみても、条件のトの接続にはン否定形単独のアクセントパターンが反映されており、「-ン=ト」という 2 つの要素からなっているとみることには無理がないと考える。したがって条件のトにおける否定述語への偏りについては、別の観点からの説明が必要であると思われる。たとえば舩木（2014）は条件のトについて「前件が肯定形で後件が反期待性を持つ場合は全国的に「ト」が使われる傾向」にあると指摘しているが、否定の条件節にもこの「反期待性」のようなものが関係している可能性がある。これについては別稿に譲りたい。

5.　まとめと今後の課題

本稿では、大阪方言における従属節を作る形式トをとりあげ、用法の違いから「引用のト」「条件のト」「付帯状況のト」に分けたうえで、節の従属度、述語の肯否の非対称性、トのアクセントという 3 つの観点から三者の特徴を明らかにした。そして分析の結果から、引用のト・条件のトがそれぞれトという接語として捉えられるのに対して、付帯状況のトはそうではなく、-ントという 1 つの接辞として捉えられるべきであることを主張した。

付帯状況の-ントについて、舩木（2014）では近世の「ずと」に由来する可能性が指摘されているが、アクセントの面からもこれは支持されるように思われる。現代の大阪方言に「-

ズト」という表現はないが、否定辞中止形の「-ズ」は使われることがあり、-ントと同じく語幹部分に下がり目がある（例：[おら]ズ、[置か]ズ、書[か]ズ、歩[か]ズ）。このアクセントパターンは付帯状況の-ントとパラレルであり、付帯状況の-ントが「ずと」に由来する可能性を示唆しているように思われる。また関連する事象に否定辞のテ形（-ンデ）のアクセントパターンがある。否定辞テ形のアクセントも-ントや-ズと同じく-ンで低くなり（例：[おら]ンデ、[置か]ンデ、書[か]ンデ、歩[か]ンデ）、またヘン否定形をとらない点でも-ントとの共通点がある。-ンデは、たとえば大西（2019）のように「否定辞-ン＋助詞デ（テ）」と分析されることが多いように思われるが、ン否定形しかとらないという接続上の制限やアクセントの特徴をふまえると、-ンデで 1 形式とみる方が妥当なようにも思われる[8)]。本稿における-ントの分析は、こうした他の形式の分析においても参照できるものであると考える。今後取り組んでいきたい課題である。

ただ、本稿ではあくまでも 3 つの観点からみたトの異同を分析したものであり、それぞれの用法の詳細な記述には踏み込むことができなかった。条件表現に与る形式のバリエーションの整理や、付帯状況の-ントと並列（対比）の-ントについての詳細な記述など、本稿で扱えなかった点については稿をあらためて論じたい。

【付記】本研究は JSPS 科研費 A20H0015 の助成を受けたものである。

【参考文献】

庵功雄（2012）『新しい日本語学入門―ことばのしくみを考える―　第 2 版』スリーエーネットワーク.

井上正哉（2009）「現代関西方言における動詞否定表現について」『日本語学会 2009 年度春季大会予稿集』pp.101-106，日本語学会.

大西拓一郎（2019）「方言から考える動詞否定辞中止形」『日本語文法』19-02，pp.3-17，日本語文法学会.

郡史郎編（1997）『日本のことばシリーズ 27　大阪府のことば』明治書院.

国立国語研究所編（1994）『方言文法全国地図　第 3 集―活用編 2―』国立印刷局.

国立国語研究所編（1999）『方言文法全国地図　第 4 集―表現法編 1―』大蔵省印刷局.

国立国語研究所編（2002）『方言文法全国地図　第 5 集―表現法編 2―』財務省印刷局.

高木千恵（1999）「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて―談話から見た使用実態―」『現代日本語研究』6，pp.78-99，大阪大学日本語学講座.

高木千恵（2000）「大阪方言におけるテ形について―形容詞・名詞述語・動詞否定形式のテ形（相当）形式―」『阪大社会言語学研究ノート』2，pp.47-62，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

8）否定辞テ形がヘン否定形を許容しない要因について井上（2009）は、-ンデが-イデに由来するとみて説明を試みている。動詞未然形-デ＞動詞未然形-イデ＞動詞未然形-ンデと、一見分析的傾向を強めているようにみえても、その出自に縛られた共起制限（やアクセントの特徴）が残っているのだと思われる。

高木千恵（2004）「若年層関西方言の否定辞にみる言語変化のタイプ」『日本語科学』16，pp.25-46，国立国語研究所.

田中宣廣（2005）『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう.

中井幸比古編（2002）『京阪系アクセント辞典』勉誠出版.

西田有希（2019）「大阪方言における引用標識のバリエーションと変化―「言う」「思う」の音便形との共起関係を中心に―」『阪大社会言語学研究ノート』18，pp.47-70，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

舩木礼子（2014）「山口東部方言における条件表現形式「ト」」『神女大国文』25，pp.51(8)-42(17)，神戸女子大学国文学会.

前田直子（2009）『日本語の複文―条件文と原因・理由文の記述的研究―』くろしお出版.

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.

南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.

山本俊治（1982）「大阪府の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 7　近畿地方の方言』pp.195-228，国書刊行会.

【参照ウェブサイト】

国立国語研究所　方言文法全国地図 PDF 版ダウンロードサイト

https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html　(2023 年 2 月 3 日閲覧)

たかぎ　ちえ（大阪大学）